戦後派世代による「特攻」の慰霊顕彰事業
――歴史認識の脱文脈化と「精神」の称揚――

Commemoration of Fallen Tokko Soldiers and Post-war Generation
—Ignoring the Historical Context through Honoring the “Spirit” of War Dead—

角田　　燎*

はじめに

終戦から 75 年が経過し、戦争体験者の高齢化が進んでいる。特に兵士としての従軍体験をもつ人々は最若年層でも 90 代となり、元兵士たちの集まりである戦友会の多くが解散している。

そうした状況の中でも、依然として活動を継続し、戦没者の慰霊祭を行う団体も存在する。筆者は、2019 年 3 月に靖国神社で行われた特攻隊戦没者の慰霊祭に参加したことがある。慰霊祭は寒空の下、靖国神社本殿で約 1 時間行われる。本殿は扉が全て開放されており、暖房設備もないため凍えるような寒さであった。だが、その凍えるような寒さのなかでも 270 人余が慰霊祭に参加していた。参加者は、90 代になる戦争体験世代の方から、遺族、自衛隊 OB、日本会議の会員、元政治家と様々な属性の人びとであった。

戦争を生き残った元兵士たちは、戦没した戦友達に対して複雑な感情を抱きながら、その慰霊顕彰を戦友会などで行ってきた。何故、そうした営みに戦後派世代も参加するようになったのか。出席した慰霊祭を主催する団体は、戦後派世代の自衛官 OB を中心に運営されている。戦争体験世代から会

＊立命館大学社会学研究科博士後期課程

を受け継いだ戦後派世代は、どのように慰霊顕彰団体を運営しているのか。そこでは、どのような問題が生じ、それをいかにして克服しようとしているのか。これらを明らかにするのが本稿の目的である。

先行研究の検討

これまでの戦友会や元兵士たちの団体の研究として、戦友会研究会[1]や吉田裕[2]の研究などがあげられるだろう。吉田は、戦友会の会報などの資料から、アジア・太平洋戦争を戦い、生き残った下士官を中心とした兵士たちの戦後史を跡づけ、戦後社会を元兵士がどのように生き抜いたのかを明らかにしている。

戦友会研究会は、当初部外者には謎のベールに覆われていた元兵士たちの「記憶の貯蔵所」と言われた戦友会の実態を明らかにした。戦友会は、「部隊」や「戦地」といった「過去に一定の集団に所属した人びと」が、「その集団を通過した後、過去におけるその共通所属を唯一の成員資格とする別の集団」をつくる「再集団化集団」である[3]。過去における共通所属を唯一の成員資格とする戦友会は、敗戦という特殊な状況が生み出した現象と捉えられ、戦争体験世代で完結する「一代限り」のものと見られていた。そのため団体の継承などについては議論にされてこなかった。

そうした中で、遠藤美幸は戦友会の高齢化に伴う活動の質的内容の変化と世代交代について論じている[4]。遠藤が研究した戦友会には、2013年頃から戦後派世代が会に参加するようになり、戦友会活動の活発化を示唆したが、他方で戦争体験の「誤った継承」の可能性を孕んでいたという。その結果が戦争体験の解釈と継承に関する内部の葛藤を生み出し、戦争体験世代は会から遠ざかり、戦友会は解散へと向かったという。遠藤の研究によって、「一代限り」と思われていた戦友会という団体の戦後派世代への継承の可能性とその困難さが指摘されたといえる。

これまで戦争体験世代が創設した団体の研究は、再集団化集団である戦友会が中心であった。敗戦から70年以上が経過した現代では、戦友会など戦争体験世代によって創設された戦争に関する団体の多くが解散し、活動を終えている。しかし、戦後派世代を含めた非当事者も集うことで、現在でも活動を続ける団体も存在するが、そのような団体に関する研究はこれまで十分にされてこなかった。戦争体験世代が減少した現在の社会で、団体がいかにして戦争体験世代から戦後派世代に運営が引き継がれ、そこで何が生じているのかを明らかにすることが求められている。

このような先行研究の状況の中で、拙稿では特攻隊慰霊顕彰会[5]という特攻隊戦没者の慰霊顕彰団体を事例に、戦争体験世代から戦後派世代へ会が引き継がれる中で、どのような変化が起こったのかを検討している[6]。この論文では、戦争体験世代が戦後派世代に会を継承するためにどのような努力をしたのか、そこで会にどのような変容が起きたのかを明らかにしている。しかし、研究の対象としている期間は、戦後から2007年頃までであり、戦後派世代が実際にどのように会を運営し、慰霊顕彰活動を行っているのかは充分に明らかになっていない。

そこで、本稿では、ここまで充分に検討されてこなかった2007年以降の特攻隊慰霊顕彰会の活動を対象とする。特攻隊慰霊顕彰会は、2005年以降急激な世代交代を行い、2010年頃には、運営の中心が戦後派世代になっている。そこでは、どのような慰霊顕彰活動が行われ、どのような問題が生じているのか。そして、その問題に戦後派世代はどのように対処しようとしているのかを明らかにする。

第1章　戦争体験世代による特攻隊戦没者の慰霊顕彰

本稿では、戦後派世代の慰霊顕彰事業を明らかにするために、特攻隊慰霊顕彰会を事例に扱う。まず、この団体を理解するために、特攻隊はどのよう

なものなのかについて述べる。その上で、第１章では、特攻平和観音奉賛会、特攻隊慰霊顕彰会の設立といった戦後派世代が会に参加するまでの特攻隊慰霊顕彰会の歴史を概観する。拙稿と重なる箇所もあるが、本稿を理解するために必要な最低限の記述を行った。

第１節　特攻平和観音奉賛会の設立

特攻隊とは、主として爆弾を搭載した航空機による艦船などに対する体当たり攻撃（航空特攻）のことを指す。それ以外にも、海軍の「震洋」、陸軍の㋹（マルレ）艇などのモーターボートによる艦船への体当たり攻撃（水上特攻）、改造魚雷「回天」による体当たり攻撃（水中特攻）などがあった[7]。ここで強調しておきたいのは、「特攻」とは、我々が真っ先に想像する航空特攻だけではなく、水上、水中など様々な形で行われたということである。そのため、一言に「特攻」といっても内部には多様な戦争体験があった。つまり、「特攻」といっても、航空、水上、水中といった違いや、陸海の違いがあり、その体験は一様ではなかった。

戦争が終わり、GHQ の占領が終結すると特攻に関わった部隊の戦友会や、特攻隊の基地があった地域などで特攻戦没者の慰霊が各地域、各戦友会などで行われていく。その中で、部隊や基地という枠組みを超えた「特攻」全体の慰霊を行う動きが現れる。特攻隊慰霊顕彰会の前身である特攻平和観音奉賛会（以降奉賛会と略称）である。その中心になったのは、部下たちを「特攻」に送り、戦後批判にさらされていた陸海軍の特攻隊の指揮官たちであった。

1952 年、特攻隊戦没者の慰霊を目的に及川古志郎軍令部総長・元海軍大将、河辺正三航空軍司令官・陸軍大将などが発起人となり、特攻平和観音像が造立された[8]。この観音像は世田谷山観音寺に奉安された。この特攻戦没者の慰霊供養が末永く続けていくために、創設された団体が奉賛会であった[9]。この奉賛会は、及川、河辺などの代表世話人を中心に運営され、世田

谷山観音寺での月例法要、年次法要を行っていた[10]。奉賛会は、陸軍、海軍といった区切りや、部隊、地域を超えて、「特攻」という大きな枠組みで慰霊事業を行っていた。だが、その大きな枠組みであるが故にその内部には、指揮官と兵士たちの対立や陸海軍の対立があったという[11]。

第2節　特攻隊慰霊顕彰会の設立と固有性の喪失

奉賛会は、昭和40年代末になると代表世話人の高齢化が深刻化し、名前だけを残して実質的に解散状態となる[12]。奉賛会が解散状態になったことを聞いた明治30年代から大正一桁年代生まれの旧軍士官有志らは、1978年初めごろに会の再編成に乗り出した[13]。

彼らは、関連諸団体の会長等有力者に発起人になってもらい、さらに各団体から代表者を集め、設立委員会をつくり、再建運動に着手した。その中で、「特攻隊の慰霊顕彰は絶対に必要だが、それは何も特攻観音に限ったことではない、他にもいろいろ道があるので、慰霊顕彰の原点に立って幅を広げるべきだ」という意見が圧倒的になったという[14]。その意見を受け、奉賛会を再整備するだけではなく、特攻隊に関する刊行物や、特攻の慰霊祭を靖国神社で行うなど、「特攻」の慰霊顕彰を行う特攻隊慰霊顕彰会が設立されることになる。会長には、元陸軍中佐であり、元皇族である竹田恒徳が迎えられ、特攻に所縁のある戦友会、団体から理事が選出された[15]。

「特攻」という大きな枠組みで慰霊顕彰活動をするために、彼らは「陸海軍特別攻撃隊の全部を網羅」した『特別攻撃隊』を発刊し、「特攻」を定義した[16]。そこでは、「決死」を含む他の「一般戦没者」と「特別」な「特攻」戦死者は明確に区別されていた。この「一般戦没者」との区別の上に成り立っている「特別」な「特攻」という意識、つまり、他の「戦没者」とは異なる「特攻」の固有性に重きを置こうとするスタンスが、特攻隊慰霊顕彰会内部の共通認識であった[17]。

その共通認識は、1990年代以降大きく揺らいでいくことになる。1990年

代は、戦争責任をめぐって日本政府の軌道修正が明確となった。「負の歴史」の清算が始まった時期であったといえる[18]。社会で侵略戦争認識が定着し始めた一方で、政府の政策転換に反発する動きが、1990年代半ば頃から急速に台頭してくるのである[19]。

特攻隊慰霊顕彰会内でも、「村山談話」や「細川首相侵略戦争発言」などに対する反発が活発になる。特攻隊員の顕彰を行うという彼らのスタンスは、「保守的」「右派的」な主張と親和性が高かった。以降「東京裁判史観」の批判が活発にされていく。自分たちや戦没した特攻隊員が戦った戦争を侵略戦争と規定する一連の社会や政治の流れは、「東京裁判史観」がこの国を退廃させているという認識である。こうした中で、特攻隊慰霊顕彰会では、「戦没特攻隊員を世に顕揚し、それをもって自虐的反日的な徒輩を打破る」ことが期待されたのである[20]。

一方で、2000年代から特攻隊慰霊顕彰会の会報には、「特攻」以外の「大東亜戦争」の各戦場についての記事や、日本の歴史についての記事が増えてくる。特攻と関係がない「大東亜戦争」の各戦場や、日本の歴史についての記事を掲載したのは、それらに「特攻精神」を見出したからであった。「特攻精神」を近代以前の歴史に見出すことの意図は、それが日本の伝統のものであることを示すためだった。特攻が日本に伝統のものであるということは、特攻を世に宣揚する大義名分になり得た。「大東亜戦争」の「特攻」以外の戦場に、特攻精神やそれと近いものを見出すことは、特攻だけではなく、「大東亜戦争」で戦った戦没者全てが同様の精神や、特攻隊員と同じ「美しさ」を持っているという根拠になっていくのである。

だが、それは結果的に従来明確に区別されていた「特攻」戦没者とその他の「一般戦没者」の区別を曖昧にすることになる。2006年には、戦没者の慰霊団体の集約を目指す大東亜戦争全戦没者慰霊団体協議会（以降慰霊協と略称）との合併案が浮上する。また、従来「特攻」と明確に区別されていた「決死」の「大和特攻」を「準特攻」認定する[21]。「決死」を含む「一般戦没

者」と明確に区別することによって成り立っていた「特別」な「特攻」という特攻隊慰霊顕彰会の固有性は、この時失われてしまうのである。

2章　戦後派世代による特攻隊戦没者の慰霊顕彰のはじまり

表1　会の変容と主要人物

	時代	主要人物	会の変容
第1世代 将官級	戦後～ 1970年頃	及川古志郎（元海軍大将） 菅原道大（元陸軍中将）など	特攻平和観音奉賛会の設立、世田谷山観音寺での慰霊祭を開始
第2世代 佐官級	1982年～ 1992年頃	竹田恒徳（元皇族、偕行社会長など）、最上貞雄（陸士54期、初代会報編集人）など	特攻隊慰霊顕彰会の設立（1982年）、『特別攻撃隊全史』の発刊
第3世代 尉官級	1992年～ 2010年頃	瀬島龍三（陸士44期、元伊藤忠会長、慰霊協会長など）、田中賢一（陸士52期、元自衛官、偕行社事務局長、英霊にこたえる会事務局長、2代目会報編集人）菅原道熙（菅原道大三男、陸士61期、慰霊協事務局長）、山本卓眞（陸士58期、元富士通社長、慰霊協会長、偕行社会長など）、飯田正能（陸士61期、元自衛官、3代目会報編集人）など	財団法人化（1993年）、大和特攻の準特攻認定、慰霊協との合併案の浮上、「東京裁判史観」の批判
第4世代 自衛官 OB	2005年～ 現在	藤田幸生（元海上幕僚長、水交会会長）、杉山蕃（元統幕長、つばさ会会長）、金子敬志（海上自衛官OB、4代目会報編集人）など	

上記の表では、理事や事務局長、顧問を歴任した菅原道熙の「特攻隊戦没者慰霊顕彰会の歩み」を参考に特攻隊慰霊顕彰会の世代区分を行い、主要人物と主な出来事を記した[22]。第1世代は、特攻観音奉賛会の設立などを行った。中心となったのは、明治10年代後半から同20年代前半生まれの終戦時、

大将・中将級の人びとである。第2世代は、特攻隊慰霊顕彰会の設立や『特別攻撃隊』の発刊を行った。中心となったのは、明治30年代後半から大正一桁年代の将官であった。第3世代は、「東京裁判史観」の批判や「大和特攻」の準特攻認定などを行った。中心となったのは、旧軍士官最若年層および、2000年代も存命で会の運営に携わっていた旧軍士官である。そのため、第2世代と第3世代の世代区分は非常に曖昧となっている。表では、中心的に活動した期間を考慮し、主要人物を各世代に割り振った。1章の内容は、第1世代～第3世代の活動についてであった。2章以降では、自衛官OBを中心とする第4世代がどのように会に携わるようになったのか、どのような慰霊顕彰活動を行っているのかをみていく。

第1節　自衛官OBの参加と戦争体験世代の減少

まず、自衛官OBがどのようにして会に参加するようになったのかをみていく。特攻隊慰霊顕彰会では、会員が減少していた2000年代から自衛官OBに後継者としての期待を寄せ、勧誘活動を行っていた。その中で、2005年には、自衛官OBである杉山蕃（元統幕議長)、藤田幸生（元海幕長)、栗原宏(空自OB)が会の理事として迎えられる[23]。理事として迎えられた1人である藤田は、1942年生まれで、遺族でも戦友でもない、海上自衛隊のOBである。藤田は、水交会[24]から、「特攻隊の慰霊顕彰を続けていくために、関係者の方々が、若い自衛隊OBの入会を希望しておられる。誰か入ってくれないか」という話を聞いたという。藤田は、「私には特攻に関して、現役のときから今までに数々の出逢いがありました。『特攻隊のこと』は、日本民族として、これからも長い将来にわたって、正しく語り伝えていかなければならない大切なことだと思っております。従って、このお話をお受けすること」にしたという[25]。このように関係団体から自衛隊OBを紹介してもらう形で、徐々に自衛隊OBを会に迎えていったのである。彼らが後に第4世代として、特攻隊慰霊顕彰会の中心となっていくことになる。

以降、特攻隊慰霊顕彰会では、世代交代が急激に進んでいく。2007 年には、「東京裁判史観」批判の急先鋒であった会報の編集人田中賢一が編集人を退任、2011 年には、元統幕議長である杉山蕃が会長に就任した[26]。更に 2012 年には、山本卓眞、菅原道熙という旧軍最若年層として会の運営を担ってきた 2 人が逝去し、第 4 世代が本格的に会の運営を担い始める[27]。

第 4 世代が会の運営の中心を担うようになる中で、会員の構成や会員数はどのように推移したのか。特攻隊慰霊顕彰会では、自衛官 OB や戦後派世代の勧誘を行っているが、図 1 のように、会員の減少に歯止めがかからない状況になっている。2004 年から 14 年間で会員数が 2 千人も減り、最盛期は 3500 人程度いた会員数は 2019 年で 1473 名まで減少している[28]。

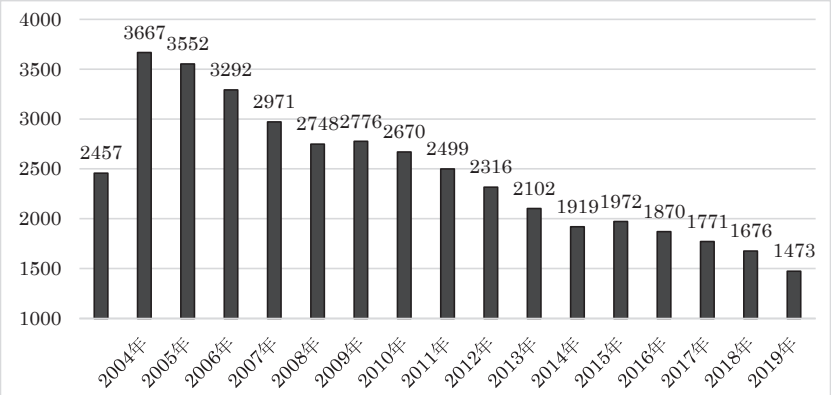

図 1　特攻隊慰霊顕彰会　会員数推移[29]

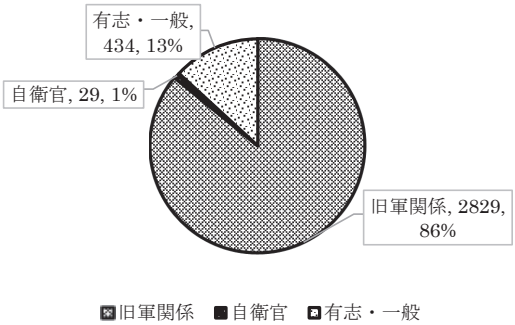

図 2　特攻隊慰霊顕彰会　2006 年度　会員属性

この深刻な会員減少の背景は、会員の大半が旧軍関係者であったことに起因する。2006 年度の会員属性を見ると、会員の 86％である 2800 人余が旧軍関係者である。

表 2　2006 年度・2009 年度会員属性

	旧軍関係	自衛官	有志・一般	合計
2006 年度	2829 人	29 人	434 人	3292 人
2009 年度	2247 人	44 人	454 人	2748 人

また、2006 年度と 2009 年度の会員属性ごとの会員数を比較すると、自衛官や有志・一般が微増しているのに対して、旧軍関係者が約 600 人減少し、会としても 500 人の会員減少となっている。2009 年度以降は会員の属性について公開されていないため、正確な情報はわからないが、旧軍関係者の高齢化、死没による退会によって会員数が減少していることが推測される。

表３　2018 年特攻平和観音年次法要参列者 [30]

遺族	旧軍関係	理事など	日本会議	隊友会	その他	合計
28 人	15 人	7 人	16 人	9 人	131 人	206 人

2018 年の特攻平和観音年次法要の参列者の属性を見ると、かつては会員の大半を占めた旧軍関係者が激減しているのがわかる。その中で、日本会議や隊友会といった友好団体の会員が多く参列しており、そうした友好団体の協力の下、年次法要が行われているのがわかる。

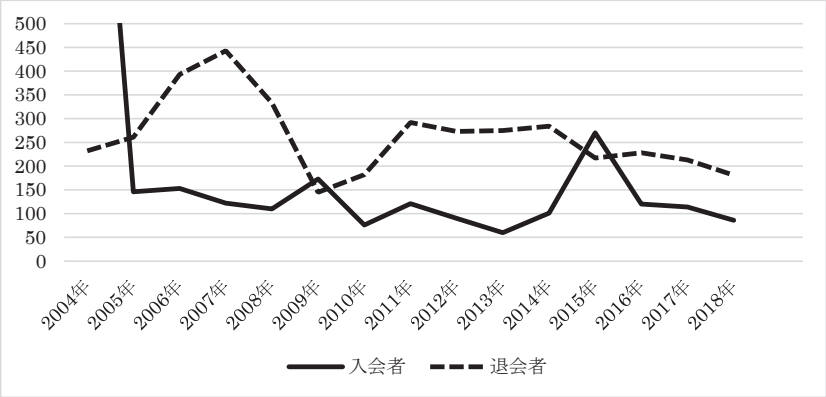

図３　入会者・退会者推移

旧軍関係者の死没などによる退会者が入会者を上回り、会員数は減少の一途を辿っている。このような状況に対して特攻隊慰霊顕彰会では、若い会員獲得のためにホームページの充実や、2015 年度には会員募集の広告を『産経新聞』や『朝雲新聞』に掲載するなど対策を講じている [31]。新聞広告によって 2015 年度は例年より多くの入会者を獲得し、会員数が増えるが、その効果は一時的なものであり、会員減少に対する有効策は打ち出せていない。

ただし、退会者を上回る入会者を得られていないとはいえ、毎年 100 人前

後の入会者を得ており、戦争体験世代の高齢化・死没を考慮すると、会員の構成は、戦争を体験した旧軍関係者から戦後派世代に緩やかに変化している。つまり、旧軍関係者が中心であった特攻隊慰霊顕彰会は、運営の中心が自衛官 OB となり、会員の比率も戦後派世代が増えている。

第 2 節　戦後派世代による慰霊顕彰事業と戦後派世代ならではの悩み

第 4 世代は、これまで行われてきた慰霊祭などを運営しながら、特攻勇士之像を全国の護国神社に奉納する運動を行うなどの特攻隊戦没者の慰霊顕彰活動を行っている。しかし、慰霊顕彰活動を行う中で、第 4 世代ならではの問題が浮上してくる。

戦没特攻隊員の遺族でも戦友でもない戦後派世代にとって、特攻隊慰霊顕彰会という戦没者の慰霊顕彰を行う団体の運営は容易ではなかった。まず、問題となったのが、特攻隊戦没者慰霊の中での、特攻隊慰霊顕彰会の位置づけである。特攻隊慰霊は第 1 章で述べたように、部隊や特攻隊の基地があった地域など、全国で行われている。その中での特攻隊慰霊顕彰会の位置づけが問題となってくるのである。運営に参加していた自衛官 OB にとって、特攻隊慰霊顕彰会は、「戦後まもなく特攻作戦の実行当事者によって設立されたもの」で、「日本の中において、特攻隊の英霊を慰霊顕彰する本流を成す組織である」と考えられていた[32]。実際に前身の奉賛会では、特攻隊の指揮官たちが会の代表世話人となっていた。また、特攻隊慰霊顕彰会設立当時は、元皇族の竹田恒徳が会長で、各地・各部隊の特攻隊慰霊団体から代表が理事として参加していた。特攻隊の指揮官が中心になることや、各地・各部隊の慰霊団体と関係を持つことによって、陸海軍の様々な「特攻」を網羅した戦史を作成することができた。それらによって「特攻」を名乗ることが可能になっていたのである。しかし、各地・各部隊から派遣されていた理事たちも、多くが死没し、戦後派世代が会の中心となるときには各地・各部隊の慰霊祭等との関係性が薄くなっていた[33]。そのため、各地・各部隊から理事が選出

される状況から、各地の慰霊祭に代表を派遣、参列する立場に変化してきている。つまり、現在の特攻隊慰霊顕彰会は、特攻隊指揮官由来の特攻平和観音の慰霊法要や、靖国神社での特攻隊慰霊祭を取り仕切っているとはいえ、「特攻」を網羅しているとは言えない現状になっている。

そんな彼らに、「大和特攻」の「準特攻」認定によって曖昧になっていた「特攻」の定義の問題などが降りかかってくるのである。大阪護国神社で2012年に行われた「特攻勇士慰霊祭」では、ソ連軍機甲部隊に対して肉弾攻撃を行った13柱の氏名が奏上され、「特攻」として合祀された[34)]。だが、この戦没者の氏名は、特攻隊慰霊顕彰会発行の『特別攻撃隊全史』には記載されていない。『特別攻撃隊全史』では、特攻隊戦没者は「命令により、特別攻撃隊の一員として出撃し、戦死後二階級特進した隊員」を対象として記載されており、後に戦艦大和等の乗組員が「準特攻」として名簿に追加された。ここでは、合祀された肉弾攻撃のような戦没者は、「特攻攻撃」ではないのかという問題が生じている。このことについて、慰霊祭に参加した当時専務理事の衣笠陽雄は、「遺族や生存同期生等にしてみれば、自らの命を捧げたことに相違はなく、特攻として認められず、特攻による戦没者として祭られてもいないのは、納得がいかないというのは理解できる」と言っている。また、衣笠は、「準特攻」として認められた「大和特攻」と、陸軍の島嶼作戦での玉砕突撃とは、死地に向かったことは同じで、「違いは『特別攻撃隊』か否かであるが、双方とも同じ特攻と見なして問題はないと思う」との見解を示した。だが、特攻隊の定義や名簿の見直しなどについては時間・資料・人員などの問題から困難であるとし、今後も前述の前提条件での名簿追加作業に限定されるとした。そして、現在重要なこととして、「特別攻撃隊と同等の活躍をされた離島や満州等で多くの特攻玉砕戦死者がおられたことを忘れてはならないことであり、その英霊の慰霊をしっかりやらねばならないということではないだろうか」と述べている[35)]。

「大和特攻」の「準特攻」認定により、「特攻」の定義は大きく揺らいだ。

「大和特攻」を「準特攻」として認めた以上、万歳突撃など肉弾攻撃についても、無視できなくなっていた。だが、「特攻」を肉弾攻撃や玉砕戦死者に広げ、『特別攻撃隊全史』に載せるのは現実的ではなかった。そのため、彼らは戦争体験世代が作成した『特別攻撃隊全史』に載せる基準（命令により、特別攻撃隊の一員として出撃し、戦死後二階級特進した隊員）を堅持しつつ、肉弾攻撃などの戦没者も、慰霊しなければならない対象としたのである。「特攻」の定義が揺らぐ中、戦後派世代は、戦争体験世代の作った「特攻」の論理に固執することで、「特攻」の拡大を抑えていた。また、戦友でも遺族でもなく、「特攻」を網羅しているわけではない戦後派世代には「特攻」の定義を変更することは出来なかったともいえる。

また、戦後派世代の自衛官 OB や会員にとっては、遺族でも戦友でもない自分たちがどのように慰霊に向き合えばいいのかという悩みがあった。具体的には、「遺族会員以外の我々一般会員は如何にして特攻隊員の精神を後世に伝えたら良いのであろうか」[36] といった悩みや、遺族でも戦友でもない自分たちや子々孫々に、どのように考えて何を伝えていけば良いのかということに悩んでいた[37]。そうした中で、専務理事も務めた衣笠は「我々顕彰会の最も重視すべきことは、特攻隊・特攻隊員の顕彰すなわち『特攻隊員の精神の伝承』である」と主張する。ただし、そこでいう精神とは、「無形な抽象的な事象」でありそれを「子孫に伝える事は言うは易いが極めて困難である。我々会員は先ず自ら特攻隊の行動を理解し、特攻隊員の心情を理解しつつ、少しずつ多くの国民に伝えていくことが必要である」という[38]。そのためには、「日頃から特攻隊員の遺書、心情について勉強する」、「特攻隊の行動・戦史・戦術について勉強し特攻隊を良く知る」、「特攻隊関係慰霊祭、月例法要に参加して、多方面の方から色々な話を聞き、自分の意見を述べる」などを行い、糧とすることが重要であるという[39]。

つまり、特攻隊の顕彰のためには、「特攻隊員の精神の伝承」が重要であり、精神という無形の抽象的な事象を継承するためには、特攻隊の勉強など

を行うことが重要であるというのである。特攻隊慰霊顕彰会では、2014 年から、会員の特攻隊に関する知識、史実、精神の把握・感得等資質向上のために、元特攻隊員を招いた講習会や勉強会、研修会を行うようになっている[40)]。

戦後派世代の会員は、特攻隊の勉強を行おうとするが、その教材となる特攻に関する番組や小説などや、特攻隊員の生き残りの証言は特攻隊の真実とは違うのではないのかと感じていた。理事長の藤田幸生は、特攻に関する番組、遺書、記録、小説、ラジオ、新聞、テレビドラマ、舞台演劇などに接する機会があったが、「それらの中には、事実に沿った感動的なものもありましたが、作品の大半は、特攻を美化するものから、断片的なもの、明らかに『いわゆる反戦平和』的な立場で批判的に編集されていると思われるものだった」。これらには、作成者の主観が色濃く反映され「事実とは少し違うのではないか」と感じられたという。特攻隊員の生き残りの体験談についても、「ご本人自身も述懐されておりますが。数十年の年月を経て、当時の実態のままであるという自信がないという」ことだった[41)]。

そこで、当時の「真実」を伝えたいと考えていた藤田幸生理事長が中心となり、森丘哲四郎という戦没学徒兵の手記を刊行する。この手記は、「誰の手にも染まらず、本人が、その時の気持ちを、素直にそのまま記して」おり、「時が経ち、何十年、何百年後になろうとも、その時代にこの書を手に取る人は皆、当時の事実と直接、接することができる」[42)]。ただし、森丘哲四郎という海軍特攻隊の学徒兵の手記を刊行したとはいえ、そこからはあくまで、1 人の特攻隊員の真実しか知ることは出来ないのであった。

第 3 章　戦後派世代による「遺志の継承」

第 1 節　戦後派世代の掲げる慰霊の真柱と「自己啓発的な特攻受容」

戦後派世代は、特攻隊の慰霊顕彰事業を引き継ぐ中で、会員の減少や、特攻の定義、特攻隊慰霊の中での位置付け、特攻隊の「真実」をいかに知るか

といった様々な問題が生じていた。その中で、戦後派世代はどのように慰霊顕彰事業に向き合おうとしたのか。

現在の理事長である藤田幸生が新財団法人化の際に示した特攻隊慰霊顕彰会の活動の真柱は、「①特攻隊の真実を忘れないこと、②英霊に対し感謝すること、③生き方を反省し、日々真摯に生きること」であった。この3つについて、藤田は以下のように説明している。

1　戦没者のことを忘れないこと

(中略)「特攻隊戦没者慰霊」の原点は、やはり、特攻作戦のことを、また、英霊の方々がどのような戦いをして散華されたのか、「その事実を忘れないこと」だと思いました。そしてその中には、御遺族の悲しみや御苦労も含まれます。

2　戦没者に感謝の気持ちを持つこと

生起した事実を知ると、戦没者の方々の覚悟、とった行動の意味やその深さ、その残された事実や自他に及ぼした影響、彼ら自身の苦しみ、悩みなど、様々なことが心の中に浮かんできます。そうして考えていると、やがてそれらを素直に感じ取れるようになってきます。それが理解できるようになったとき、初めて国難に殉じた英霊の方々に「感謝する気持ち」が湧き上がってくるのでした。それこそが、慰霊にとって最も大切な原点だと思えてきました。

3　戦没者に恥じないよう反省し、精進すること

英霊の方々に対する感謝の気持ちが湧いてくると、「今の自分は、英霊に恥じるところは無いか」、次には、「英霊の方々の想いや期待に十分応えているか」という気持ちが込み上げてきます。「日本の安寧と将来の発展を期待し、親兄弟など愛しい人達の幸せのため」に命を捧げて任

務に赴いた英霊の方々を思うとき、私達は「日頃の自分自身の生き方を反省し」、本来の日本人らしい生き方をしなければならないことに気付かされるでしょう。そして、英霊の方々が望んでいた「日本の再生に努力していくこと」が、本当の意味での最終的な慰霊顕彰になるのではないかと思えてくるのです[43]。

藤田によれば「①特攻隊の真実を忘れないこと、②英霊に対し感謝すること、③生き方を反省し、日々真摯に生きること」という3つの真柱は、「やすらかに！ありがとうございます！つくします！」ということであるという。そして、「この思いを胸にして、これからの活動を続けてまいりたいと思います」と述べている。このように特攻隊を感謝や反省の対象とするのは、藤田1人の主張ではない。2014年から発行されている新年号には、毎年「特攻勇士に感謝と敬意を」という言葉が1頁に記されている[44]。

また、会報の末尾にある「会員ご入会の案内」には、「当顕彰会は、先の大戦の末期、一つしかない命を、祖国の安泰と家族や大切な人のために捧げられた特攻隊員に対し『あなた達のことは忘れません。有難うございます。感謝します。私たちも努力します。どうぞ安らかに！』を胸に、慰霊・顕彰を行う団体です」と記されており、藤田の慰霊の真柱が会の方針となっていることがわかる[45]。

戦没特攻隊員を感謝や決意の対象とする在り方は、井上義和が鹿児島の知覧特攻平和会館で起こっていると指摘する「自己啓発的な特攻受容」や「遺志の継承」モデルに近いといえる。井上の提唱する「自己啓発的な特攻受容」は、本論において参照すべき重要な概念なので、以下で簡単に説明する。

井上によれば、知覧で特攻隊の物語に触れることによって自分の生き方を見つめ直し、前向きな意識状態に持っていく「活入れ」が、2000年代以降、スポーツ合宿や、社員研修、自己啓発セミナーで起こっているという[46]。この活入れには、特攻隊との断絶・対照関係に標準する【タイプ1】と、連続・

継承関係に標準する【タイプ2】が存在するという。具体的に、【タイプ1】では、「戦争の時代を思えば、平和な時代に生きている私たちは幸せ」、「特攻隊員の勇敢さや家族愛に心打たれ、自分も見習おうと思う」といった戦争の時代の彼らと平和の時代の私たちの間の圧倒的な落差がもたらす効果であり、相対的に恵まれた自らの環境に改めて目を向けさせ、現在の持ち場で力を尽くすことを促す。【タイプ2】では、「特攻隊員は大切な人の幸せを願って出撃した。その究極の利他性に心を打たれる」「特攻隊員は祖国の未来を想って出撃した。私たちがいまあるのは彼らのおかげ。彼らに恥じない生き方をする」といった大切な人の幸せと祖国の未来のために命を使った特攻隊員に感謝し、彼らから受け取った命のタスキを、次世代に繋いでいく使命感を抱くという。この【タイプ2】では、特攻隊員の想いが私たちのなかに入り込み、生き続けているような、継続・継承関係に標準している。そのエッセンスは、感謝・利他・継承のセットで、この3点セットが論理的一貫性をもって体得されると、自分の持てる力をみんなの幸せのために使わなければ、という気持ちになる[47]。この2つのタイプを当事者自身が区別しているとは限らず、両方のタイプが同居する可能性もあるという。また、活入れの人びとは、特攻隊員の物語を、戦争や作戦の評価とは完全に切り離している。つまり歴史認識の脱文脈化を経たうえで受容しているという[48]。

井上は、「自己啓発的な特攻受容」を1つのモデルとして、戦争体験の継承の在り方が、従来の「記憶の継承」という枠組みから「遺志の継承」という枠組みに変化していることを指摘している。従来の「記憶の継承」では、「真実はどうだったのか」が問われるのに対して、「意志の継承」では、「何のために命をつかったのか」という個人の遺志に力点が置かれる。井上は、戦争体験者が減少する中で、今後は、「記憶の継承」の枠組みは後退戦を強いられ、「遺志の継承」の枠組みが前景化すると指摘している[49]。

第２節　特攻隊慰霊顕彰会でおこる「遺志の継承」

前節で説明した井上の提起する「自己啓発的な特攻受容」や「遺志の継承」と特攻隊慰霊顕彰会で藤田が掲げる慰霊の真柱は、ともに特攻隊を感謝や決意の対象としており、非常に似通っているといえる。本節では、特攻隊慰霊顕彰会の歴史を振り返りつつ、「自己啓発的な特攻受容」と似通っている真柱がどのような経緯で打ち出されたのかを考察する。

> 思うに、日本人ほど安易に価値観を逆転させる国民もまれであろう。きのうの「善」が、翌日にはいとも簡単に「悪」に一変する。昭和二十年八月まで「生き神様」と仰がれた特別攻撃隊員も、八月十五日一夜が明ければ「特攻くずれ」である。（中略）祖国が戦いに敗れると、ダメな兵隊だったことを棚にあげて、軍国主義を否定するために軍務をできるだけないがしろにしたと自慢する文士がいれば、生命の貴さを力説するために、「あたら若いいのちを粗末にして」と特別攻撃隊員をとやかくいう進歩的知識人もいた。途中でグラマンに食われることを承知で練習機にまで爆装して出撃させた軍上層部をあげつらうならともかく、特攻隊員の純粋な心を傷つける言葉に、私は憤怒を覚えたことが、一度や二度ではない[50]。

これは、元リヨン大学客員教授の長塚隆二が書いた会報『特攻』３号の記事である。この文章からは、終戦直後の価値観の急激な逆転に対する怒りが読み取れる。戦中に「軍神」と崇められた特攻隊員は、戦争が終わると一転して、「軍国主義の手先」や「犬死」「無駄死」と蔑まされた。復員した元特攻隊員は「特攻くずれ」と蔑まれ、特攻隊員の遺族も「戦争協力者の母」などと非難を浴びた。

創設時に在籍していた特攻隊慰霊顕彰会内の旧軍関係者の人々は、こうした戦後のネガティブな特攻観をどうにかして変えたいという意識があった。

そのため、「一般戦没者」とは違う、「特攻」の戦没者を慰霊顕彰するために会を創設したのである。その上で、特攻隊のあげた「偉大なる戦果」を強調し、「世界の人びとに強い感銘を与え、わが国永遠の平和と発展の礎となっている」として、「その精神と偉業とを後世に伝え」ようとした[51)]。

だが、特攻隊慰霊顕彰会内でも特攻隊の美化に対しては、特攻隊指揮官の責任を強烈に追及する論稿が散見される[52)]。また、戦中に士官に虐げられた元特攻隊員が、その士官が慰霊祭でいつもでかい顔しているから殴りにいこうと、世田谷山観音寺の慰霊祭で元上官に接触することもあった[53)]。遺族の中には、特攻隊指揮官を「絶対に赦せない」と語る人も存在した[54)]。また、特攻隊の中でも、海軍の神風特攻隊を強調する元海軍士官が存在し、旧陸海軍の関係は決して良好なものではなかった[55)]。「特攻」としての慰霊顕彰を行いながらも、内部には陸海の対立や、指揮官、士官と兵士の対立などが戦後も存在したのである。

また、「特攻」といっても、会員個々の「特攻」への思い入れは、必ずしも同じ方向に向いていたわけではない。例えば、人間魚雷「回天」に関わった人は、「回天」への強い思い入れから特攻隊慰霊顕彰会に参加していた。他の部隊や特攻兵器に関わった人も同様に、自分の関わった「特攻」への強い思い入れから参加していた。個々に思い描く「特攻」は違えど、自分の戦友ないし部下は、他の一般戦没者よりも「特別」な戦没者だという共通認識を基に特攻隊慰霊顕彰会に集っていた。「特別」な戦没者に対するネガティブなイメージを少しでも払拭しようと、特攻隊慰霊顕彰会では、様々な対立や問題を後景化しながら慰霊顕彰事業を行っていたのである。しかし、「東京裁判史観」を批判する中、会で共有されていた共通認識、固有性は喪失される。こうした状況の中で、戦後派世代は会を引き継いだのである。

戦後派世代は、陸軍特攻としてでも海軍特攻としてでも「水上特攻」、「水中特攻」「航空特攻」としてではなく「特攻」という大きな枠組みで、その慰霊顕彰事業を引き継がなければならなかった。

「特攻」には、上述した様々な問題や対立があったが、この問題や対立をどのようにして捉えるのかは、どのような立場で「特攻」を見るかによって見解がわかれる。例えば特攻隊の指揮官の立場からすれば指揮官なりの、特攻隊員を美化する理由があった。旧軍関係者も自分の戦争体験や特攻体験によって「特攻」への見方はそれぞれにあり、問題とするものも違ったのである。戦後派世代は、そうした複雑な状況を念頭に置きながら「特攻」と向き合わなければならなかったのである。戦後派世代にとって会は、特攻隊指揮官から脈々と続くものであるからこそ、特攻隊慰霊の本流をなす組織であると思っていた。しかし、その指揮官には、会内からでさえも批判があった。戦争体験や特攻体験を持たない戦後派世代には、どのような立場に立つのも難しかったのである。そこで歴史認識を脱文脈化して、「特攻」を、精神を学び、感謝し、決意を現わす対象とするのである。

理事長の藤田は、「特攻に対する世間の考え方見方は様々で、その人の生まれや育ち、人生への価値観によって多様であり、一概に何が正しいとは言えない」[56] といい、更に「彼らの一面のみを捉えて、称賛したり、批判したりすべきではないと思われる。ましてや、当事者ではない、同世代でもない私達以下の世代が、軽々しく、評論すべきでは無く、それは出来ないことであると思われる。ただ『感謝と、弔意と、我が決意』あるのみである」という[57]。会長の杉山は、戦争体験世代が減少しているのにふれ、この様な時代に、「我々が心せねばならないのは、若い盛りの特攻隊員の皆様が、現在に生きる我々に何を望み、如何に有るべきかを望んで散っていかれたかということに想いを馳せること」であるという。しかし、「数千を数える英霊の、それぞれのお考え、お立場、環境も一様ではありません」。そこで大事なのは、「その逐一を云々するのではなく、今に生きる我々が、ともすれば怠情・華美・享楽に流れがちな人間の弱さを自覚し、自戒する引き金として、若くして散った方々の心情を忖度することが、慰霊の持つ重要な意義であろう」という。そして、「換言すれば、死者に手向けをし、弔慰を表すことは人とし

て当然の習わしですが、犠牲者の価値をより高いものに引き上げ、次世代のよき発展を目指す精神的根拠にすることの重要性を自覚しなければならない」という[58]。

戦後派世代は、「特攻」に対する評価を同世代ではない自分たちがするべきことではないこととし、特攻隊員の精神を自戒する引き金とし、特攻隊員に感謝し、決意の対象とするのである。こうすることによって、意図的に「特攻」に関わる様々な問題を棚上げにした。戦後派世代は、靖国神社で行われていた特攻隊合同慰霊祭の名称を特攻隊全戦没者慰霊祭に変更している。これは、「戦後70余年を経過し、陸海軍の名残りである『合同』の名称を外し、特攻隊で亡くなられた全ての戦没者を分け隔てなく一緒に慰霊をしようという考えによる」ものであるという[59]。こうすることによって、かつて存在した陸海軍の対立を意図的に後景化しているといえる。

戦争体験世代が創設した特攻隊慰霊顕彰会は、会員個々の戦争体験や特攻体験に起因する「特攻」への思い入れや「記憶」の集積体であった。戦後派世代は、「特攻」という大きな枠組みでその団体を引き継がなければならないが故に、どの「特攻」への思い入れも「記憶」も選択できないのである。そのため、「記憶」ではなく、特攻隊員の「精神」が持ち上げられ、「遺志の継承」が行われているといえる。

特攻隊慰霊顕彰会で起きている「遺志の継承」は、井上が指摘する知覧で起きている「自己啓発的な特攻受容」と歴史的経緯は違うが、歴史認識を脱文脈化して、特攻隊を感謝や決意の対象とするという構図は似通っている。だが、知覧と特攻隊慰霊顕彰会では、決意の先にあるものが違うといえる。知覧では、特攻隊の物語にふれることによって、特攻隊に感謝し、自分も頑張って生きなければと決意するが、この決意の先にあるものは個々人によって異なるのである。つまり、あくまで個人にとっての「活入れ」の物語なのである。

一方、特攻隊慰霊顕彰会では、特攻隊に感謝し、単に頑張って生きようと

するだけではなく、「保守」的な意味でのより良い社会を作ることが目指されている。理事長の藤田は、特攻平和観音年次法要の祭文で以下のように述べている。まず、藤田は中国や韓国、ロシアといった隣国からの「日本に対する法や協定を無視した脅威が日増しに増大、強大化している」と指摘する。その上で、「私達国民は、国家の尊厳を保ち、生き抜いていくために今こそ特攻隊の皆様のことに思いを致し、その事実から、知恵と、忍耐と、覚悟と勇気を学び、抑止の力を整えるべきときである」という。しかし、「最近の国内世相を眺めますと、あらゆる分野で、自分以外のことに尽くすという公の精神が失われ、人として自分を磨くことを忘れてしまっているように見受けられてなりません」。そのような中で、安倍総理は「これから日本が歩むべき道として、『国家繁栄こそ平和の礎』であり、今後とも『積極的平和主義』を国是として追求していくことを誓われました」。「我が国の、世界の中における佇まいが、大きく変わろうとしており」、この変化は、「あるいは、英霊の皆様が望んでおられた方向ではないかと拝察しております」という。「私達は、皆様方への慰霊顕彰活動が、我が国の再生の一助になることを信じ、活動の継承、強化を誓うものであります。」「在天の御霊、どうか私共をお導きください。皆様のことを、決して忘れません。感謝申し上げます。そして、皆様に恥ずかしくないよう、よりよい社会を作るために努力することをお誓い申し上げます[60]」。この祭文では、特攻隊の精神を学び、隣国への抑止の力とすることや、安倍総理の掲げる「積極的平和主義」への期待が語られたうえで、特攻隊戦没者に感謝を述べ、彼らに恥じないよい社会をつくることが述べられている。

会長の杉山は、「周辺国の軍事拡張、国内問題を転化する我が国への不穏当な行動は、根深いもの」があると指摘し、このような情勢下では、「不当な圧力に毅然として対応する『国としての誇り』が必要」であると主張する。そして、「これこそが、真のヘリテージであり、我々顕彰会が目指す公益性と相通ずるものであると考える次第です。本年は新内閣の下、山積する課題

に国民的協力が求められますが、私どもも、顕彰会の活動を通じ、厳しい状況下、敢然として国に殉じた英霊の皆様を追悼する国として、当然大切にすべき事業を振作し、より良き伝統を積み重ねていくため、一層の努力が必要と考えて」いるという[61]。

周辺国の圧力に対応するために「国としての誇り」が必要であり、それこそがヘリテージであり、そこに特攻隊慰霊顕彰会の活動と相通じるものがあるという。このように特攻隊の精神を学び、抑止の力とすることや、防衛問題と特攻隊慰霊顕彰会の活動を連関させて考えているのは、藤田や杉山といった会の運営の中心が自衛官 OB であることに起因している。また、「保守的な」よい社会を目指しているのは長年、靖国神社や日本会議、英霊にこたえる会と友好的な関係にあり、「東京裁判史観」を批判してきた特攻隊慰霊顕彰会のスタンスに起因しているといえる。

井上の「自己啓発的な特攻受容」が、個人にとっての「活入れ」の物語であるのに対して、特攻隊慰霊顕彰会では、特攻隊に感謝し、決意したうえで、「保守」的な良い社会をつくることを目指すという大きな物語に接続されているのである。

おわりに

特攻隊慰霊顕彰会は、部隊や地域といった枠組みではなく、「特攻」という誰にとってもある程度聞き馴染みがある大きな枠組みで慰霊顕彰を行っていた。そのため、友好団体の協力を得ることや、戦後派世代の会員を獲得することができたのである。ただし、その時既に、「特別」な「特攻」という固有性は喪失していた。また、運営を引き継いだ戦後派世代は、「特攻」という大きな枠組みであるが故に「特攻」を語りにくくなっていた。「特攻」には、陸海軍の対立、指揮官と兵士の対立など様々な対立の歴史が存在した。「特攻」内部の対立は、どのような立場で「特攻」を見るかによって見解が

分かれるが、戦後派世代はあくまで「特攻」という大きな枠組みで慰霊顕彰を行うためには、どの立場にも立つわけにはいかなかったのである。その中で、どうにかして「特攻」の真実を知るために、特攻隊員の手記を刊行するが、1 人の特攻隊員から「特攻」全体を語ることは出来なくなっていた。そのため、「特攻」の体験を持たない自分たちには「特攻」を評論することはできないとし、対立の歴史を後景化する。その上で、「特攻」の精神を称揚し、感謝や決意、精神を学ぶ対象とする。更にこの感謝や決意、精神を学ぶ先には、「保守的」なよりよい社会にすることが目指されていた。これは、「東京裁判史観」を批判する会の長年のスタンスや、防衛問題に強い関心を持つ自衛官 OB が会の運営の中心にいたことも影響していた。

つまり、固有性が喪失された状態で会を引き継いだ戦後派世代は、「特攻」の「記憶」を選択できなかったために、「記憶」ではなく抽象的な「精神」を称揚し、「特攻」の歴史認識を脱文脈化していたのである。複雑な対立の歴史をもつ「特攻」の慰霊顕彰団体を戦後派世代が引き継ぐには、このような歴史認識の脱文脈化された「遺志の継承」が必要だった。歴史認識の脱文脈化された「遺志の継承」がなされているが故に、防衛問題に強い関心を持つ自衛官 OB や、戦後派世代の遺族、友好団体である日本会議の会員といった様々な人々が参加することが可能になっている。また、歴史認識を脱文脈化し、特攻隊員の精神を称揚することによって自分たちが「特攻」を語ることや、慰霊顕彰活動を行う正統性を補填しているともいえる。

このように、固有性が喪失された中で精神を称揚することによって、非体験者が体験を語ることや、戦没者の慰霊顕彰の正統性を補填しようとする図式は、特攻隊慰霊顕彰会に限った事ではない。団体ではないが、非体験者が「特攻」の「体験」を語り継いできたのは知覧も同じである。知覧では、地域住民の固有の体験が忘却される一方、「特攻」への感情移入の記憶が選び取られ、「特攻」が語られている[62]。知覧でも、「特攻」の精神を持ち上げることによって、「特攻」の歴史的評価を避けるといった歴史認識の脱文脈化

が起きていた[63)]。そこでも、「精神」を持ち上げることが、非体験者が「体験」を語る正当性を補填していたのではないか。特攻隊慰霊顕彰会の事例は、非体験者が、選択的に歴史認識を脱文脈化していることや、精神の称揚を通じた正統性の補填をおこなっているといった現代の戦争の語りや慰霊顕彰活動の一側面を照射しているのではないか。

注

1）高橋三郎、高橋由典、新田光子、溝部明男、伊藤公雄、橋本満『新装版共同研究戦友会』インパクト出版会、2005 年。
2）吉田裕『兵士たちの戦後史』岩波書店、2011 年。
3）高橋三郎、高橋由典、新田光子、溝部明男、伊藤公雄、橋本満前掲書、112-113 頁。
4）遠藤美幸「『戦友会』の変容と世代交代」『日本オーラルヒストリー研究』14 号、2018 年、9-21 頁。
5）正式名称は、公益財団法人特攻隊戦没者慰霊顕彰会（略称特攻隊慰霊顕彰会）。創設時の名称は、特攻隊慰霊顕彰会で、1993 年に財団法人特攻隊戦没者慰霊平和祈念協会に名称変更され、2011 年に現在の名称に変更されている。本稿では、混乱を来さないために基本的に特攻隊慰霊顕彰会と表記する。
6）角田燎「特攻隊慰霊顕彰会の歴史」『戦争社会学研究第 4 巻』2020 年、172 頁 -192 頁。
7）吉田裕『日本軍兵士』中公新書、2017 年、52 頁。
8）「特攻平和観音由来」会報『特攻』1 号、1984 年、2 頁。
9）菅原道熙「特攻隊戦没者慰霊顕彰事業の戦後の歩み　その五・その六」会報『特攻』82 号、2010 年、12-13 頁。
10）菅原道熙「特攻隊戦没者慰霊顕彰事業の戦後の歩み　その五・その六」会報『特攻』82 号、2010 年、12-13 頁。
11）大貫健一郎・渡辺考『特攻隊振武寮』朝日新聞出版、2018 年、232-251 頁や、「世田谷観音寺と特攻隊慰霊顕彰会の歴史」会報『特攻』109 号、2016 年、23-38 頁などから特攻観音奉賛会内部に旧陸海軍間の対立や兵士と士官の対立が存在した事が伺える。
12）秋山紋次郎「特攻隊慰霊顕彰会設立運動の大要」会報『特攻』4 号、1987 年、3-4 頁。
13）菅原道熙「特攻隊戦没者慰霊顕彰事業の戦後の歩み　その五・その六」会報『特攻』82 号、2010 年、12-14 頁。
14）秋山紋次郎「特攻隊慰霊顕彰会設立運動の大要」会報『特攻』4 号、1987 年、4 頁。
15）「回天会」、「特攻殉国の碑保存会」、「全日本空挺同志会」「㋹顕彰の若潮会」「幹候九期（操縦）の会」などが参加していた。

16）生田淳「特攻を支えた魂」『会報特攻』14 号、1992 年、5-7 頁。
17）本稿で「固有性」という語を用いる際には、福間良明の議論を参考にしている。福間良明『「戦跡」の戦後史』岩波書店、2015 年では、「固有性」という語は、個々の死者や地域の戦争体験に固執し、他の地域・団体等の戦争体験との連続性・共通性を語ろうとしない傾向という含意で用いられている。
18）吉田裕『兵士たちの戦後史』岩波書店、2011 年、216 頁。
19）吉田裕前掲書、117 頁。
20）「編集担当よりお知らせとお願い」会報『特攻』31 号、1997 年、28 頁。
21）菅原道熙「お知らせ」会報『特攻』69 号、2006 年、58 頁。この時は、「准特攻」という字が用いられているが、後に「準特攻」と改められる。
22）菅原道熙「特攻隊戦没者慰霊顕彰事業の戦後の歩み　その七・その八」会報『特攻』83 号、2010 年、5-7 頁。
23）菅原道熙「お知らせ」会報『特攻』62 号、2005 年、39 頁、40 頁。
24）元海軍士官親睦組織、2001 年海上自衛隊 OB の桜美会と合併。
25）藤田幸生「第 14 回震洋慰霊祭に参列して」会報『特攻』63 号、2005 年、59 頁。
26）田中賢一「特攻をご覧の各位に御挨拶申し上げます。」会報『特攻』70 号、2007 年、64 頁。「お知らせ」会報『特攻』88 号、2011 年、62 頁。
27）「追悼　山本卓眞名誉会長」会報『特攻』91 号、2012 年、7 頁。「追悼　菅原道熙顧問」会報『特攻』92 号、2012 年、11 頁。
28）特攻隊慰霊顕彰会では、2003 年秋から会員倍増計画として、旧軍関係者団体への勧誘や、靖国神社遊就館などに入会のしおりを配置するなどを行った。1 年余りで、1700 名の新規入会者を得るが、そのほとんどが旧軍関係者であったという（菅原道熙「協会よりお願いとお知らせ」会報『特攻』61 号、2004 年、30 頁）。
29）図 1 及び、図 2、図 3、表 2 の出典は以下となっている。菅原道熙「お知らせ」会報『特攻』63 号、2005 年、60 頁。菅原道熙「お知らせとお願い」会報『特攻』67 号、2006 年、59 頁。「平成 18 年事業報告」会報『特攻』71 号、2007 年、65 頁。「平成 19 年事業報告」会報『特攻』75 号、2008 年、41 頁。「平成 20 年事業報告」会報『特攻』79 号、45 頁。「平成 21 年事業報告」会報『特攻』83 号、2010 年、41 頁。「平成 22 年事業報告」会報『特攻』87 号、2011 年、45 頁。「平成 23 年事業報告」会報『特攻』91 号、2012 年、49 頁。「平成 24 年事業報告」会報『特攻』95 号、2013 年、37 頁。「平成 25 年事業報告」会報『特攻』100 号、2014 年、36 頁。「平成 26 年事業報告」会報『特攻』105 号、2015 年、40 頁。「平成 27 年事業報告」会報『特攻』110 号、2016 年、40 頁。「平成 28 年事業報告」会報『特攻』115 号、2017 年、40 頁。「平成 29 年事業報告」会報『特攻』120 号、2018 年、35 頁。「平成 30 年度事業報告」会報『特攻』126 号、2019 年、56 頁。「平成 31 年度事業報告」会報『特攻』130 号、2020 年、56 頁。

30)『第 67 回特攻平和観音年次法要』(2018 年 9 月 23 日参列者配布物)をもとに筆者が作成。参拝者の備考をもとに作成した。理事などとは、特攻隊慰霊顕彰会の理事と会長と備考に記載された人をカウントした。事前の出欠の連絡をもとに作成したものであるため、当日急に不参加になった人が含まれている可能性がある。また、同様の理由で、当日急遽参加した人は含まれていない。

31) 8 月と 10 月に『産経新聞』と『朝雲新聞』(自衛隊の活動、安全保障問題全般を伝える安保・防衛問題の専門紙)に広告を掲載した(「平成 27 年度事業報告」会報『特攻』110 号、2016 年、39 頁 -40 頁)。

32)「藤田理事長講演録」会報『特攻』120 号、2018 年、37 頁。

33) 例えば、水中特攻回天の慰霊顕彰団体である回天会の会長で特攻隊慰霊顕彰会の評議員などを務めた小灘利春は、2006 年に亡くなっている。以降、一時期回天会主催の慰霊祭と疎遠になっている(「小灘利春氏を悼む」会報『特攻』69 号、2006 年、31 頁)。

34) この肉弾攻撃は、終戦直前の満州で行われた肉弾攻撃である。終戦直前の 1945 年 8 月 7 日、ソ連は日本に対し、一方的に中立条約を破って宣戦布告、8 月 12 日～ 14 日、満州の磨刀石において、侵入してきたソ連軍機甲部隊に対し、石頭予備士官学校第 13 期幹部候補生 920 名余が、急造爆雷を抱いて肉弾攻撃をし、対戦車戦闘でその大半が戦死したという。当時、戦車に対抗し得る兵器が無く、爆薬で肉弾攻撃をせざるを得なかった。後退せずに敢然と攻撃したのは、軍の後退配備と国境付近の民間人同胞の安全な後退を掩護しなければならなかっとという背景もあったという。衣笠陽雄「大阪護国神社『特攻勇士慰霊祭』に参列して」会報『特攻』94 号、2013 年、33 頁 -36 頁。

35) 衣笠陽雄「大阪護国神社『特攻勇士慰霊祭』に参列して」会報『特攻』94 号、2013 年、33 頁 -36 頁。

36) 衣笠陽雄「第四十一回都城市特別攻撃隊戦没者慰霊祭に参列した」会報『特攻』116 号、2017 年、6 頁 -9 頁

37) 藤田幸生「これからの『特攻隊戦没者慰霊顕彰会』について」会報『特攻』91 号、2012 年、10 頁 -12 頁。

38) 衣笠陽雄「第 47 回原町飛行場関係戦没者慰霊祭に参列して」会報『特攻』119 号、2018 年、3 頁。

39) 衣笠陽雄「第四十一回都城市特別攻撃隊戦没者慰霊祭に参列した」会報『特攻』116 号、2017 年、6 頁 -9 頁

40) 衣笠陽雄「当顕彰会会員の資質向上のための施策の紹介①」会報『特攻』101 号、2014 年、35 頁 -38 頁。

41) 藤田幸生「『森丘哲四郎手記』の出版について」会報『特攻』109 号、2016 年、39 頁 -40 頁。

42) 藤田幸生「『森丘哲四郎手記』の出版について」会報『特攻』109 号、2016 年、39 頁 -40 頁。

43）藤田幸生「これからの『特攻隊戦没者慰霊顕彰会』について」会報『特攻』91 号、2012 年、10 頁 -12 頁。
44）会報『特攻』98 号、2014 年、1 頁。
45）このような「会員ご入会のご案内」になったのは、2017 年からであり、それ以降同様の「会員ご入会のご案内」が記されている（会報『特攻』114 号、2017 年、44 頁、会報『特攻』130 号、2020 年、60 頁）。ちなみに、それ以前の「会員ご入会のご案内」では、「当顕彰会」は、「特攻隊員たちの御霊を慰霊し、感謝する事を目的とする団体であります」。「私達は、彼らからその精神を学び、自分たちの生き方を考え、より良い社会の実現に寄与したいと活動を続けております。」とある（会報『特攻』112 号、2016 年、40 頁）。
46）井上義和『未来の戦死に向き合うためのノート』創元社、2019 年、114 頁。
47）井上前掲書、165-171 頁。
48）井上前掲書、185 頁。
49）井上前掲書、197 頁 -205 頁。
50）長塚隆二「特別攻撃隊の英霊に捧げるアンドレ・マルローの言葉」会報『特攻』3 号、（時期不明、昨年発行しなければならないという記述と前後の会報の発行状況から 1986 年と推測される）、6 頁。
51）「特別攻撃隊の頌」会報『特攻』4 号、1987、2 頁。
52）特攻隊慰霊顕彰会内の指揮官批判の論稿の代表的なものとして、小杉久彌（「特別攻撃隊員の本音」『会報特攻』27 号、1996 年、5 頁 -8 頁）の論稿が挙げられる。小杉は、「戦争指導者である一部の参謀達が、机上で立案企画したあの狂気とも思われる作戦命令に我々は従わされ、消耗品扱いにしておきながら、特攻隊員は全員『本人が希望し、喜んで突入、散っていった』などと言うのは、彼らの保身のための欺瞞で、自分達の立案した、あの狂気じみた特攻作戦を正当化させ、さらに特攻を美化させためで、特攻戦死者を冒瀆するものではないか」と主張する。また、「当時、戦争指導者達上官の命令は絶対的であり、我々はただ、命ぜられるまま出撃するしかなかった哀れな存在であった」といい、「狂気とも思える特攻作戦を立案・命令した戦争指導者の欺瞞に満ちた無責任なる発言に対し、私は異議を唱える」と強烈に指揮官を批判している。
53）元特攻隊員たちが元士官を取り囲むと元士官は「あの時は悪かった」と詫びたといい、「あの鬼のようなやつがとても小さく見えて、殴る気がすっかり失せてしまった」という。また、この元士官は、このような元特攻隊員の襲撃を恐れて終戦後も護衛用に拳銃を持ち、自宅では軍刀を手放さなかったという（大貫健一郎・渡辺考『特攻隊振武寮』朝日新聞出版、2018 年、320 頁 -321 頁）。
54）遺族から指揮官への批判として、遺族の一人は、陸軍特攻隊の指揮官の一人である菅原道大死後に、その息子深堀道義に対して、「あなたのお父さんは絶対に赦せない」と面罵されたことがあった（深堀道義『特攻の真実』原書房、2001 年、序文 ii 頁）。菅

原に対しては、戦後に元特攻隊員が、「菅原は腹も切れずに、のうのうと暮らしている。軍司令官の前で、『腹が切れるなら、切ってみろ』と辱める」ために、菅原の自宅を訪れることもあったという（同上、339 頁 -340 頁）。

55）海軍の特攻隊指揮官の一人である猪口力平は、「海軍兵学校、江田島出身にあらざる者は海軍にあらず」とよくいい兵学校で固まり、特攻隊でも兵学校出身の関行男を誇張していたという（「世田谷観音寺と特攻隊慰霊顕彰会の歴史」会報『特攻』109 号、2016 年、34 頁）。

56）「藤田理事長講演録」会報『特攻』120 号、2018 年、37 頁。

57）藤田幸生「巻頭言」会報『特攻』121 号、2018 年、3 頁。

58）杉山蕃「平成 25 年　年頭のご挨拶」会報『特攻』94 号、2013 年、3 頁。

59）石井光政「平成 28 年第 3 回理事会及び第 1 回臨時評議会の実施報告」会報『特攻』114 号、2017 年、43 頁。

60）藤田幸生「祭文」会報『特攻』112 号、2016 年、3 頁。

61）杉山蕃「平成 27 年　年頭のご挨拶」会報『特攻』103 号、2015 年、2 頁 -3 頁。

62）福間良明『「戦跡」の戦後史』岩波書店、2015 年、193-228 頁。

63）戦時中に報道班員として特攻隊員と関わった高木俊郎は、「特攻隊員の死を美しく讃えるのではなく、『無駄な死』をしなければならないことへの彼らの悲憤と、これを生んだ組織病理や無責任を追求しようとした」（福間前掲書、210 頁）。一方で知覧の知覧高女なでしこ会は、「生としのはざまのなかで苦悩しながら、永遠の平和を願い、国の護りに殉じていった若い人々」といった特攻理解をしていた（同上）。高木にとって知覧高女なでしこ会の特攻理解は、「無駄死を強いた暴力」から目をそむけているようにしか見えなかった（同上）。このように知覧高女なでしこ会の特攻理解は、特攻の精神を称揚する事によって、「特攻」の評価から距離を取っていたのである。蘭信三は、上記の議論をもとに、井上義和の指摘する歴史認識の脱文脈化された「特攻への活入れ」は、オリジナルではなく、知覧高女なでしこ会の特攻理解をなぞったものでしかないと指摘している（蘭信三「『特攻による活入れ』という衝撃」『戦争社会学研究第 1 巻』勉誠出版、2017 年、51-64 頁）。